
甲乙付けがたい下僕ハッ？

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甲乙付けがたい下僕ハツ？

【Nコード】

N7562X

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

一人称で、『僕』の話ですねー。お暇だったら読んでみてください。
い。

僕は今日の陽が差し込まれてくる時間帯に音について新たな認識を持った。いままでは僕は音というものに対して感じていたことが、ひとことで言うてしまふと纏まりだった。集合体であつて、その集合だけで完結されているものだと思つて、音ひとつひとつ自体が景色にもなつていているんだということは知らなかった。思いもよらなかつたんだ。

でも今日ね、声の無い、失敗がない録音された音の集合体を聞いている途中にさ、ほら楽器ひとつひとつのかき鳴らすそれらの音が、景色を生み出してきて、雫が葉からこぼれるとかいう何ともありきたりな景色を思い起こしてしまつたんだ。でも瞬間瞬間のことさ。所詮、僕なんてその程度のものでね、何時だつて安定していなくてさつきまではこうだと思つていたことを、次には否定してしまつていたりする不安定だ。で、今はこういう四方面を灰色の壁で覆われている、淡い西洋のただ中に放り投げられてしまつていようような気がする。

実際にここは何処かは、わからない。目を開けたらこの灰色の壁や、色鮮やかな子供の喜びそうな玩具ばかりが転がっている牢獄のような、窓が高くて格子がかかつていて、それが陽の日差しに縦の模様を作つて縞々なかんじさ。僕はそこに馬のぬいぐるみを置いて、シマウマを即興で製作してみた。で、こんな程度のことをしてしまふような自分自身の軽薄さに呆れて、空しくなつたりする。ただ床に転がっている子供が喜ぶような玩具は僕は嫌いで、あんまり楽しそつでもないから、適当に蹴つ飛ばしたりしている。

娯楽がたくさん溢れている充足された世界の中で、まるで百年前の子供たちが喜ぶような工夫しかしていないように見える玩具を与えられているのは、本当に屈辱的というのかな、僕がなさない愚かな人間だということを叩きつけてきたようつで、つまり喧嘩を売ら

れているとかいう野蛮な格好悪い言葉を言いたくなるような行為をされているんだ。でも誰がこんなことをしているのかはわからないんだよね。例えば、この牢獄のような灰色と子供の玩具の部屋には、訪問者は日に一人しかない。何処か砂漠の民族という雰囲気のが、仮面をつけた、わざとみずぼらしい格好をしているらしき仮面の人々が毎日くるんだ。来て僕が生きるための御飯や、新しい玩具、そういうものを置いて、置くだけで、立ち去っていく。言葉をかけられた覚えはないな。また同時に、僕が言葉をかけた覚えもない。何をされるかわからないからね。仮面のそいつは物々しい斧を持っていて恐ろしいから話掛け辛いのだ。下手に怒らせて斧で惨殺されるなんて、ごめんだ。

それにしてもお腹が減ってきた。今は陽が落ちそうな時間帯でね、外のおそらく西洋世界では今頃お仕事という義務のようなそれを終えた人々が、朱色の夕焼けを背にそれぞれの自由を謳歌するための歩行を始めていることだろう。そんな時間だ、僕だってお腹くらいは減る。どうか仮面の人に、早く来て欲しいものだ。でもいつも、陽が落ちてからそれはやってくるんだよね。この時間帯には僕は、することも、されることもない、完全に社会的に一人となれている孤独でもあり、幸福でもある時間なのだろうさ。この灰色に塗れて、自分自身も灰色に染まってしまえばいいのだと自惚れることが出来るほど、ここでは他者からの干渉がない。自分の世界に浸れと脅迫されているかのような、圧倒的な孤独の環境だよ。なんでここにいるのか、僕は理由を知らない。記憶は壊されているらしくて雑音混じりのテレビから流れるザー、ザー、の砂嵐になっているからさ。どういう理由でこうなっているのか、僕は知らない。知ることも、仮面の人を斧をまず降ろしてくれなきゃ、何も知ることはできないんだろうから、そうなるとふと閃いたけど、玩具で何かを探った方がいいのかもね。ここには玩具がたくさん転がっている。色とりどり、形も様々、使用の仕方も様々な玩具たちは、ここでずっと転がっていて、埃を被っているんだ。でも埃を被らせているだけじゃ存

在意義が無くて可哀想だから、少しはいじくつてあげた方が良いのかもれないから、うずくまって手を伸ばしてみるんだ。まずは赤い牛みたいな玩具だね。かくかく首が不安定なその玩具を、両手の十本の指で支えて、僕の目の前に持ち上げてやって、夕陽の差し込まれてくる光をそれに重ねてあげる。赤い牛は光を得て、水を得た魚とはいかないで、ただ首をかくかくさせるだけだけど、生き物になつてくれたように見えて、ひとりで退屈なこの部屋にいるから発生する僕の孤独感を紛らわしてくれてはいるかもね。でも、それつてつまり一人じゃなくなるってことだ。

僕は今は一人が良い。だって腹も減っているし、音について閃いて僕の存在意義に意味を持たたような気がして心地よい時期なんだ。一人について、孤独はあるけど心地良い気持ちも味わつてもいる時間帯なんだ。だから赤い牛が首をかくかくさせることは、僕にとつては嫌な風景だな。そういえば音の景色だなんて、楽しい話をしていたものだな。もう楽しくなんかないかもしれない。でもゴミ箱に捨てるなんて汚いことは言わないさ。そんな偉そうなこと、よくできるものだよ。でも僕は今一人だからそうやって自信を持って言えるんだけど、大勢の前で一緒に生きていく時には、偉そうなことなんて勇気を振り絞るか鈍感になるかしなきゃ、できやしないことだよ。ね。ああ、赤牛はもう置こう。丁度夕焼けも沈みはじめて、玩具たちも色を無くしていく。僕も色を無くしていく。灰色の壁たちも、床も、天井も。いや、目が慣れれば青白い夜の世界に包まれるのだからね。僕は何を言っているんだろう。非生産的な思考を繰り返しても、得にはならないし誰かを楽しませたりできない。仮面の人が悪いんだ。或いは、この牢獄に僕を閉じ込めた存在が悪いんだ。仮にそいつのことをクズと名づけよう。いや、違うな、NOと名づけよう。これも違う。牢と名づけよう。甲と名づけよう。ああ、甲ということにしよう。甲が悪いのだとして、じゃあ僕は乙だろうか。でも今は甲に文句を考えることは止めよう。飯が仮面の人によつ

て運ばれてきた時にそれは考えることにしよう。そもそも僕には甲の見当なんてまったく付かないんだ。少なくとも個人ではない。甲には僕自身のこと含まれているような気がするし、世界全体が内包されているような気もする。つまり手強い奴なんだ甲は。つかみづらい靄みみたいなもので、ああいやだなということなんだよ。考えるのは面倒だ。様々な知識を得て、編集し、纏めて、文章化する、という行為を何年も掛けてようやく手触りくらいはわかるようになるのが、きつと甲に違いない。輪郭をわかること自体が難易度の高い存在がそれだとしたら、まったくもって一番厄介なのは、そういうわかりづらい存在の甲を認識してしまおうとする乙たる僕自身で。僕は馬鹿で阿呆たる乙であると感じてしまうのは、甲という認識する必要がない存在を認識してしまうのは、あまりに愚かだからだ。実際に甲に深い痛みを負わされた訳ではないのに、実際に与えられた苦痛というのは、総量としてはおそらく、世間一般程度のレベルだったに違いないのに、僕はそれを深く深く僕自身の中に根ざしてしまった。だから甲乙の関係性はいつになっても消えないままに、灰色の牢獄の中においても空気越しに繋がってしまっている。あの鉄格子の向こう側に果てしなく広がっている甲、そしてここにいる甲の一部でもある乙。音を景色だとかいったさつき。赤い牛で暇つぶしをしたさつき。

ため息をついた。とても深く、ため息をついた。

そして黄色いきリンの大きなぬいぐるみを尻に敷いて床に座ることにした。とても静かだ。ほぼ無音と言っても良い。

瞳を閉じると瞼が下りて来たということだから、真っ黒になって光の残影のようなものだけが仄かに見える。あと、集中すれば金の粒子たちが泳いでいるのが見える。これは僕以外のみんなだつてそうだろう？目を瞑れば見える、星の流れのような、金色の粒子たちが真っ黒の中を踊るようにして走り回っている。集中しないとぼやけてしまうけど、見ようと思えば見ることが出来る、金色の粒子さ。どういふ理由でこれが見えるのか、僕は知らない。これも甲の一部分ということだ。

にしても寒い。毛布の一つや二つがあつてくれても良い。玩具ばかり一辺倒に置かれているこの灰色の牢獄で、僕は上は長袖のシャツ一枚だし、下は薄手のジャージだし靴下だつて無いよりはましだが大して温かくもないさ。毛布が欲しくなる寒さだ。陽も落ちたんだ。これからは寒くなつていくばかりだ。

ガタン…

聞き覚えのない音が聞こえたせいで僕は瞼を開く。寒さのせいで鳥肌をたてながらもキリンのぬいぐるみから立ち上がり、静まり返つてしまった牢獄で、じつと耳を澄ましてみる。自動車が走る音も人の喋る声も小鳥のさえずる声も聞こえない、隔離された無音の空間で、聞き覚えのない音を聞くのは珍しい事だ。

再び　ガタン…は鳴つて、ああ、やはり何か…何かがいる気配がする…と実感して僕は、音の方へと歩を進めてみる。壁の向こう側から聞こえてきている音。丁度鉄格子の窓がある側の壁だ。ガタン、という音は頻繁に鳴り響くようになって、壊している、そう、壁を破壊しようとしてくれている何者かがガタンガタン言わせているのではないか、と僕は察した。

途端に気持ちが高揚した。光線が放射状に僕の頭から光を放ち、牢獄の暗闇を照らし上げる光源となつてパーツと開けた世界。煮詰

まっていたらしい脳味噌が新たな活路を開いてくれたおかげだ。存在する意義を音がなんちゃらとか言っでごまかしたりして時をやり過ぎしていた孤独を好むはずの僕も、壁が壊れてくれる可能性を知った瞬間にパーツとなってしまうた。矛盾とはこのことか。でも誰にも言ってないんだから良いんだ。僕の脳味噌の中で僕が矛盾したことを想像しようが、誰に迷惑がかかる？僕の思考が透けて世界に伝播されない限りは、何の問題もないんだよあははは。つつわけで期待。壁よ開けー、開けー。

しかし、と冷静にならなければならない。陽が落ちて真つ暗の牢獄内と僕のお腹の減り具合から察するにもうじき奴が来るはずだ。仮面をつけた物言わぬ監獄者にガタンという音を聞かせては……。

僕はそう気が付いて慌てて灰色の部屋に唯一ひとつだけある鉄扉その方角に身体をむけたら、すぐ目の前に、監獄者、いた。

仮面をつけて斧と食事を持った僕と背丈は同じくらいの監獄者。「……………」彼の無言の威圧が恐ろしい。そして、ガタン…が鳴った。鳴ってしまった。大きな音だ、監獄者がよっぼど耳の聞こえない人でなければ、聞き取ったことであろう。そして実際に聞き取って、異変を感じ取ったらしい。平常が壊れる可能性が近づいていることを理解し、そうされないよう抵抗しようと感じたらしい。監獄者は始めて声を発した。小さな、ちいさな、とても聞き取り辛い、声というか呻きだったわけだが、僕の耳にかすかに聞こえて、僕はそれをこつこつという言葉だと認識した。秩序を乱すものは抹殺して血みどろ。聞き違いでないならば背中に背負っている斧で、ガタン、という音を鳴らして壁を壊してくれていると窺えるその僕にとっての救済を、斧を背負った監獄者は血みどろにするといった。血の塊にするという意味だ。

監獄者は僕への飯、盆に乗っている夕食を一人用テーブルの上に置いてから、颯爽と立ち去ろうとする。心なしかいつもより足の進む速度が早く見える。ガタンはまだ鳴っている。とめなければ、救済は消える。光明は血に、僕は青白い牢獄で闇を纏う。いやだ、い

僕はキリンのぬいぐるみの上に腰を下ろしていて、瞼を開くとすぐに左手が大丈夫かどうかと視線を動かした。大丈夫だった。左手はそこについている。安堵した。あれは夢だったんだ、と僕は今そのことを実感した。何時の間に寝てしまっていたんだろう。どうやら丁度、陽が落ちた辺りらしいけれど、夕飯はまだ運ばれてきていないみたいだ。テーブルには埃を被っている本が数冊置かれているだけで、お盆も、食事も、血もない。

僕はひどくどきどきしている。心臓はフルに稼働していて、血管が収縮してるような圧迫感があつて、どこか息苦しい。さっきガタン…という音が鳴り始めたのは、ちょうど陽が落ちて少し経ち、夜の青白さが灰色の牢獄を染めるようになった頃。ちょうど今辺りだ……。

ガタン……

聞こえた。心臓のどきどきという喧しさはさらに強まりを見せ、いても経つてもいられない気持ちにさせられ、僕は駆け出していた。背後に振り向く暇も無い。さっきのが夢で今が現実だとして、さっきの夢が正夢だとしたら、僕には一切立ち止まって様子を窺っている暇などない。何としてでも壁の向こう側にいる僕の救済に、逃げる、と伝えなければならぬ。ガタン。ともしっかりその音が大きく聞こえる壁の位置を特定してから、僕は声をあげた。まだ仮面の人は鉄扉を開けていない。叫ぶなら今の内だ。「逃げる！ 僕のこととは後で助けてくれ！ 今はタイミングが悪いから、そこを立ち去ってくれ！」心臓がやばい、破裂しそうだ。でも伝わってくれたのだろうか、ガタン、という音が一旦止んだ。僕は安心する。一旦離れてもらって、夕飯を食べ終わった頃にでもまた来てくれれば、その時は本当に僕は救済してもらえるかもしれない。

ガタゴトン！

しかし予想以上に凄まじい音が鳴ったことで、驚かされる。何が起こったのかと壁を注視すると、さらに驚かされてしまって、足元

もしれない、この肩ア！死ぬ死ぬ死ぬ死ぬどうにかして引っ張れ、
ていうかそうだと向こうにいる救済の奴助けてちょんまげ、引っ張っ
てくれちょんまげって何だよ、早く引っ張って引っ張って引っ張っ
て、ああ、もう目の前にまで仮面の人に来てしまった！ 逃がし
てしまうなら、血みどろに 短絡的な思考回路をしている人だ、
と僕は思った。逃がしてしまふなら血みどろ、って極端にも程があ
る。冷静になれよ。頭を冷やせよ。仮面を外せよ。

斧が僕の目の前で、刃を月明かりに反射させながら、振り上げら
れる。銀色に輝いている刃の部分が、僕の頭目掛けて、振り下ろさ
れる……。

しかし本当に刃が、僕の視界から1という数字のように縦になっ
て落ちてきた瞬間、僕の頭を貫くであろうその時に、僕の両足はす
ごい勢いで引っ張られて、一気に上半身が向こう側に抜け出た。

……ガキンツ！

刃が床に振り下ろされてしまった音が背後から聞こえる。あれが
ザシュ、という音だったら僕の頭は大出血サービスだったろうが、
僕は今牢獄の中にはいない。外にいるのだ。

見上げれば明るい満月。夜空にはラメのようにキラキラしている
星々と、暗い色をしてはいるが広大な雲たち。穏やかではあるが、
たしかに吹いている夜風。かすかに感じる生き物の気配。そして目
の前には、犬の耳を生やしている幼い少年。どこか野生児染みた、
服を着た犬みたいなの、しかしどうみても幼い少年である者が、目の
前で。

「危ないトコロだったね」

ちよつと馬鹿っぽい口調で、にんまりと笑った。その笑い方もな
んか馬鹿っぽい。

「立てますかあ」

などと言つので僕はうなずいて、そして「助けてくれてありがと
う」と言つと、デヘヘ、と汚らしく笑ってから、頼まれたんですよ
ー、と犬耳の少年は言った。誰に？と尋ねようと思つたが、背後の

壁が斧で壊されようとしている音、ガアン、ガアン、と聞こえてきたので、僕は慌てて飛び上がりそうになる。

「た、助けてもらってありがたいけど、いろいろ事情もわからないけど、遠くに逃げないと斧を持った監獄者が来てしまう」

と僕が言つと少年は「なるほど」と言つて、

「なら僕の背中に乗るとよろしいでしょお。巨大な犬に変身することもできますよ」

とへらへらと馬鹿な感じで舌を出したと思つたら、もう少年は巨大かつ毛むくじゃらな大型犬に姿形を変えていた。茶色。何て奴だと驚きながらも僕は彼の背に乗つて、遠くに逃げてくれ、と頼み込んだ。「りようかいー」と軽い調子で大型犬は喋る。

僕は大型犬が走り出して遠くに逃げるその寸前に、周囲の様子を窺つた。この建物の様子は覚えておいた方が良くかもしれないと思つたのだ。

すると不思議な光景が目につく。緑の、蛍光色という奴だろう。月明かりを吸収してとても光り輝いているそれが、いたるところに散乱していた。門らしきレンガとか、こげ茶の土とか、背後の僕が今までいた牢獄の壁とかに。緑色の蛍光色のそのこびりつき方は、夢でみた僕の左手が作った血貯まりに少し似ていたから、何か怪物の血とかかな、と思つて苦笑したくなる。スプレーか何か、落書きみたいな感じが血に見えるだけだろう、蛍光色の血なんて、まさに怪物が流すような血があるはずがない、と僕は思った。そしてそんなことを思っている時に、背後の方から、仮面の人のそれと思わしき絶叫が聞こえてきたのだけれど、僕はその絶叫が繰返し繰返し、「犯罪者め、嘘つきめ！」と言っているとわかった。何だか不愉快だった。僕が犯罪者？嘘つき？それともこの僕を救済してくれた少年のことを言っているのか？監獄者の癖に人を殺そうとしたあいつの方が、よっぽど犯罪者だ。きつとあの仮面の人は僕を逃がしてしまつたから気が狂つてしまつて、適当なことを言っているのだろう。

「犯罪者め、嘘つきめ！」

僕は犬になった少年の背に乗って、夜の風をぶわーっと全身に浴びながら、満月の下を駆けた。

爽やかな風だ。牢獄の中では味わうことの決してできないことだ。僕は自由になったんだ。孤独をやめることになったんだ。胸がざわつくが、きつとこれは興奮しているに違いない。

甲が僕を待っている。乙たる僕を、待っている。

両眼は僕が生まれた時から、僕の顔の上の方に二つ、ずっと変わらずについてきて僕に景色を見せてくれてきた。そういう役割を持っている存在が、僕の眼球二つだ。それが今映してくれている景色、風景というものに僕は違和を感じざるを得ない。

犬少年に跨って眺める、人が住んでいる都市らしき空間は、今まで僕が知っている都市とはまるで違う風景を僕の眼球に映し出してくるのだ。

それに犬少年である彼に跨っている僕は、特に目立つ存在じゃないということも不自然だ。そこら中で犬に跨って都市を駆け抜けている人々が見受けられる。僕の知っている都市という奴では、みんなは自動車や自転車に跨って、道路を走っていたのに今はどうだ、道路というよりかは、砂利道というのだろうか、そんな感じで自動車が走りづらいであろう造りになっているではないか。

建ち並ぶ建造物だって、何と言うのだろうか、こういうのを独創的というのだろうか、アイディアーとか、オリジナルティーというのに溢れてる感じで、鉄くずだけで構成されている巨大な鉄塔とか、まるでサザエの貝殻のような外見をしているドームのような建物とか、時計が壁に何百種類と貼り付けられているビルだとか、赤白の縞々模様が奇抜な一軒家だとか、どうみても見た目はダンボールにしか見えないものだけで造られている建物とか、他にも様々あるが全てが一筋縄ではいかない外見をしている。

街中の街灯も何だか小洒落っていて、オレンジ色の暖かみある色彩が犬少年や僕、街中を駆け抜けている人や、歩いている人、それら全てを照射してくれている。治安は良さそうで街行く人々はどこか知性的に見えたり穏やかそうに見えたりするし、衛生面もよろしいのだからゴミなども見受けられない。

ここは一体どういう都市なのだろうか。変わっている建物のセン
スはこだわり過ぎてて好ましくもないが、嫌ではないし、行き交う
人々の様子がどこか良さそうに見えて友達になれそうだ。つまり住
みやすそうな場所なのだ。不良っぽいのもいなければ、変質者らし
き人も、常に怒っているような人もいない。なんて都市だ。人間社
会の中に、こんな場所があるなんて信じられない。

僕は知っている。人間社会はとて不完全で、失敗だらけで、不
条理なものだ。それは何時どんな時代でも変わらないことのはずだ
った。歴史という一側面の過去記録を覗くだけでも、そこにはたく
さんの不条理があつて、幼い頃の学校だとか近所とかにも、不条理
はあふれ返っていた。なぜなら人間は機械じゃない、生物だからで、
失敗をしてしまう動物だからだ。機械を作ることではできても、自分
自身を機械にすることはできないのが人間だったはずだ。

でもこの都市は何と言うか、そういう『失敗』が本当に少なそう
な、異様な雰囲気を放つ空間だ。何なのだろうこれは。僕は未来
にでも来たのか。様々な失敗が防がれるようになった素晴らしい社
会にタイムワープでもしたのか。わからない。僕の記憶はザー、ザ
ー、と壊れてしまっていて、思い出す、という行為が上手く出来な
い。ノイズが走って駄目だ。眼をつぶれば、金色の粒子が踊ってく
れるだけで、過去は映し出されない。

考えている内に、犬少年は立ち止まった。その急停止に驚きつつ
両眼を開くと、宙にオブジェみたいなのも独特のセンスをしてい
て、細かな彫刻が表面にされていて、赤、黄、青、の点灯ではなく
て一つの円に七色くらいの点灯があつて、それが事細かにチカ、チ
カ、と点滅していた。丁度交差点のような所で、四つくらいそのオ
ブジェが取り付けられている。

「綺麗なもんだね」と言うと、

「はあ。まあ、言われてみればそうかもしれませぬ」

などと、何を言っているんだらうこの人は、みたいなりアクション
をされたので恥ずかしい。で、よく考えてみると、あれは信号

機なのかもしれないな、と察するのだった。察している内にそのオブリエダか信号機は点滅して、「しっかり捕まっていってくださいね」と僕に告げてから、犬少年は再び急加速をかけて砂利道を駆け抜ける。たしかに、しっかりと捕まっていけないと振り落とされてしまうような加速で、これは慣れが必要だな、とわずかに嘔吐感を催しながら考えた。

やがて都市から人気がなくなってきた。どうやら都市の中心からは外れた位置に向っているらしく、湖が左側にある砂利道を走るようになった。湖の周辺を弧を描く感じで回っていて、大きい湖だからこれ三十分くらいは、湖が左側にあつた。何湖？と尋ねてみると、犬少年はくすくすとおかしそうに笑ってから、ネリイです、と答えた。ネリイ湖。聞き覚えの無い湖だ。ネリイ湖のその周囲全てには深海色の街灯が設置されていて、都市と比べると何処か寂しくも見える。まあ、郊外だから落ち着くような雰囲気にしたいのだろう。先ほどから男女、カップルらしき手を繋いでいる人々が通りすぎる。そういう場所、らしい。

「ネリイ湖公園とも呼ばれるトコロですよ。えっとお、ここを抜けてもまだ目的地には着きませんから、少し休憩していきましようか」。あ、でも今の時間帯だと、いろいろとお邪魔かもしれないですねー。えへへー」

僕の位置からでは犬少年の顔は見えないが、犬の顔をしていながらも、きつと馬鹿みたいに歪んでる表情をしていることだろう。命の恩人(?)に馬鹿というのは失礼だけれど。

「後、どれくらいかかるのかな」

とその答えによって休憩するかどうか決めようと思って尋ねると、軽く二時間くらいすすかねー」

という眩暈がするような返事が返ってきた。

「きゅ、休憩していいこう」と慌てて言うと、

「じゃあカップルのふりでもしますかー。なんつってえ、どへー」

とか言うので、もう何だかこの犬少年、わけがわからない。

とりあえず気まずいながらも公園っぱい空間で一休みすることにした。ベンチはたくさんあったけど、カップルが全部使用しているし、木陰とかも危うくて入り込みづらいし、ブランコにも男女がいて、トイレにも男女が殺到している。もうわけがわからない。

「この、色ぼけどもがッ！」

僕は一人ごちて唯一空いていたベンチで眼を閉じて金の粒子を眺めようとした。

それをする前に少年に戻った犬耳くんが飲み物を二つ抱えてやってきて、いやー男一人で並ぶのはさすがに恥ずかしかったんですけどおいしいんで買ったよー、などと言った。十分くらい姿を消していたのは並んで飲み物を買っていたかららしい。人気のジュースという話のそれを二つ、片方を僕に渡してくれた。

「ストローが一つのジュースにつき二本なんですよ、これ、カップル専用なんですよねー、使っちゃいますかねー。あ、さすがにそれはないっすね。はい、調子に乗りました、ごめんください」

異様すぎるほどに馬鹿げた話し方をする犬少年であった。

僕を牢獄から救ってくれて三十分以上背中に乗せてくれて、これからは二時間も乗せてくれるらしく、しかもジュースまで買ってくれた最高な人だ。何だか知らないが、こんな少年に助けられてとてもラッキーだと思う。幸運だと思う。

でも馬鹿なのも間違いないかな、と思いながらジュースについている二本のストローをどっちも無理矢理口に含んでジュースを飲んでみた。そんなことをする僕も馬鹿かもな、と思いつつ隣の少年をチラッと何気なく見てみると、もうジュースを飲み終わって満足そうな顔をして馬鹿面だった。

何この人、と正直思った。

しかもゲップしたし。

「さあ、行きましようか」

まだ僕は全然飲み終わってない。

「遅いですねー。あ、僕が飲んで差し上げましようか。あ、お呼び

でないですよー。ぐほー」

「一々最後に変な声を発するのは何なのだろうか。」

「あー、遅いですよー。暇つぶしにマーキングでもしてこようかなー」

それってすなわち立ちションだろ。カップルが多いこんな場所でマーキングするなよ。

「あ、ウンコもしたくなってきた」
いろいろと問題だ。

「ああ、腹減ったなあ」

落ち着きが足りない。喋らないと気が済まないのだろうか。

「何か持ってません。上手いもの。あー、匂いがしないなあそういう」

牢獄にいたんだから当たり前じゃないですか。

「すみませんでした、調子乗ってましたちょっと黙ります。だからそんな怖い顔しないでよ」

「けっこうびびり。」

「ぐひー」

また変な声をあげやがった。

うーん、この謎めいた都市に住んでいる人々はみんなこんな性格をしているのだろうか。だとしたらこの都市に住むのだとしたら、僕も最後に、ぐひー、とか、ぐほー、とか言わなければいけないのだろうか。だとしたらある意味住み辛い。犬少年という存在がいる時点でだいぶおかしいけれど。まるでファンタジーの世界だ。そういうえばこの少年は何と言う名前なのだろう。

「そういうえば、なんてお名前でしたっけ」

「僕は、サントリーという名前です。略してサトと呼んでくださいれば結構です。ほひー」

「そうですね」

「あなたは何と言うお名前か、僕は知っていますかね」

何故だか知らんが犬少年はベンチから立ち上がると偉そうなポー

ズを取ってくる。僕の名前を知っていることが何だというのか。つか僕の名前……僕自身、が思い出せない、んですけど。

「…………あれ」

人には名前があるのが普通ではないか。

思い出すことができない。

眼を瞑ってみても記憶は何も思い出されませんが、まさか名前まで覚えていないのか。

「本当に記憶喪失みたいですね。でっへへへ。ずびー」

野蛮な人のように汚らしい笑い方をするが笑う所じゃない。失礼な犬少年だ。サトくんは馬鹿で失礼な犬少年ということだね。嫌な奴だな、と思う。まあ憎めない感じという奴だけれども。

とりあえず自分の名前を思い出せないというのは不気味だ。

だから僕はサトくんが僕の名前を教えてくださいながらそれに越したことは無いとを感じる。だからいろいろと助けてくれたサトくんにまた助けてもらうのは、何処か気恥ずかしいという感覚があるのだけれど、尋ねなければわからないままだ。

「そうみたいだ。あの、教えてもらっても良いかな。できれば……」
するとサトくんは偉そうなポーズをさらに偉そうに見せる、両腕を組んでフンと鼻息をもらすみたいなのだった。サトくんはみっともない奴らしい。人の名前を教えるくらいでこんなに偉そうな態度をするのは失礼だ。

「あなたの名前は、ポリフェノールDXガンバレルマーチ・スペインキンデリートマツハ・シューマツハ・イトウ・ホンジャルツク・アバハマダナドンクサイ・ドンクサイ・ベルサンマーチタイムDX・パンツ・ポリフェノールDXです」

ん、と僕は呆然とした。

そしてこっただけ長い名前をソラで言えるサトくんは、とても暗記力のある素晴らしい犬少年だな、と思つて偉そうなポーズをするのも仕方がないな、と納得した。

でもその名前は長すぎだよね、とツツコミを入れたのだった。

覚えらんねえよ……。

犬少年くんが行方不明。公園から出発する寸前、『ハーデス公園』と表札みたいなのが貼られている門の所まで出て来たというのに彼はちよつとマーキング忘れてました、とか言つてぴゅんと風のように立ち去つてしまい、闇影夜に紛れた。そのせいで僕は公園に入りしていく男女の影と交錯するだけで、にっちもさつちも行かないという奴だろう、前後不明の都市の中では行き場は無くして落ち着かない。

生い茂る木の緑葉は黒い影となつて風に揺れ、さわ、さわ、と騒がしくもなく、かといつて静かという訳でもない按配でそのせいでさらに落ち着かない。公園というのは何故、こつ木というものがいづぱいあるものなのだろう。僕にとってはこのさわ、さわとうるさい木たちは、不安を煽る嫌らしい奴としか映らない。かといつて視線を下にさげたら、『ハーデス公園』という表札が光を放っているのが眼にまぶしいし、通り過ぎる男女に不審がられているような視線を送られている気がして、ああやはり落ち着かない。

僕はその場につつ立って犬少年を待つ、ということに耐え切れなくなりネリイ湖とかいうのがある方角へと歩き出してしまふ。どうにも堪えられない。犬少年は鼻が良いのだから、場所を離れてもきつと僕を見つけてくれるだろう。何せ、犬なのだから。

適当に見当をつけて夜道を進み、途中犬人間の走っているのに轢かれそうになつたが、犬側の方から避けてくれた。乗っている人の睨みつけてくる視線が痛かつたので、それからは左右に気を取りながら砂利道を横断し、ちよつと草が植えられた坂になつている所があるので、その上り坂を上がってみると、ネリイ湖とその輪郭を取り巻く青の街灯たちの、その一部分に出ることができた。本当に広い湖らしくて、右を見ても左を見ても延々と青の街灯が等間隔に

設置されているのが幻想的でさえある。坂を下りてコンクリに立ち、湖のその深淵を覗き込んでみると本当に暗くて、藍色で、波しぶきだけが少し白いから見える。たまに水が撥ねてきて、肌や服がわずかに濡れるのが嫌だなと思って、一步下がり、何気なく周囲を見回してみると、左側の方には都市の輝き、朱色のそれがあるのがわかるし、右側はしかし対照的に暗くて、青の街灯がより寂しげだ。

その右側を覗き込むようにして眺めてしまう。何て暗いのだろう。引きずり込まれてしまいそうになる。左側の都市は、あれはあれで楽しげで暖かそうだろうけれど、青の街灯だけが頼りの今にも消えてしまいそうな灯りしかない闇や影が、妙に深く、もしかすると目の前にある湖の黒い深淵よりも深い黒を持っているように見える。僕は息を呑んで、しばらくその風景を眺めていたのだけれど、ふと鼻に匂いがついた。花、をイメージさせる香りだと気が付いて、それが左側の深い暗闇の側、そっちの方角から漂っている、ような気が、した。でも確かに左側に鼻をひくつかせてみても、匂いは薄くて、ほとんど感知できないが、右に顔を向けて匂いを嗅いでみれば、ああ花の香りに間違いないとわかる。花に関しては詳しくないから、何の花だとかは全くわからないのが寂しいところだ。僕は引きずり込まれるようにして、匂いのする側へと歩を進めてみる。何だか、気になるのだ。で、二、三分湖の縁を右の方角に向って歩き続けたみたのだけれど、歩く内に寒くなってきてしまっ、そういえば長袖のシャツを一枚着ているだけなのだった、と薄着で湖のところまで降りてきたことを後悔する。ここは少し寒い。

そんなことを思っていた辺りで、地面のコンクリに視線を落とっていた僕は花を見つけた。香りを放っていたその大元かはわからなかったが、歩き始める以前よりも匂いは、たしかに強い。膝を落としてみて、僕は鼻で匂いを嗅ぐ。ああたしかにこの花が匂いの根源だ。たった一輪で、こんなコンクリのひびの隙間から生えてきていて、湖のすぐ縁で花は蕾で開いてはいない。だがたしかにここで力強く咲いているように見える。二、三分前までずっと左側にいた僕

のところにもまで香りが届くのだから、コンクリのひびの隙間を縫って地表に出ることなんて、もしかしたらこの花には容易なことなのかもしれない。でも、こんな他には仲間もない湖の隣で咲いていても、どうしようもないのもまた事実だろう。何だか無性に、この花を見ていると根っこからむしり取って、草原の所に埋め変えてあげたい気分にもなるが、根っこを引つ張るつもりで中途からちぎってしまつては、殺してしまうことになる。花を開く前に、匂いを放つこともなくなって枯れてしまうだろう。茶色くなって萎れてしまふ、だろう。

「それは、そのままにしておくんだ」

声が背後から聞こえたと思つたら羽交い絞めにされた。何…？と予想だにもしない背後からの行為に驚かされながらも声の主は男性だったとはわかる。羽交い絞めにされた部分には凄まじい圧力がかけられて、身動きを取らせてもらえないな、と冷静に考えている間にはすでに坂の辺りに放り投げられてしまったので、僕は腰辺りを強打してしまい痛みには堪える。うごっ、という感じ。

「摘み取るうとしただろ」

男は暗闇の中でそのシルエツトが巨大だということがすぐくわかる。筋骨隆々の大男とお見受けするが何処か口調の荒いところから、怒りの感情を発露しているのだと理解できるが、花を摘み取る気持ちなんて、まあ、場所を移してやるうという気持ちはあつたが、悪いようにする気なんてなかった。それが急に羽交い絞めにして坂のちよつと固いところに放り投げるなんて、どうかしてる、ひどいにもほどがある、不躰がすぎる。

「っつ……」

しかし相手が大男だというのは困る。周りに一切手助けをしてくれそうな人の見当たらないことから、自分の憤りを相手にぶつけることがどうにも恐ろしいというか、怒つてもいるみたいだし下手したらぶん殴られて骨折、殺される可能性だつてあるのではないかと思える。ああ、びびつてしまつていふというのだろうが、仕方が無

いじゃないか、ていうか僕は何も悪いことはしていないのだけれど。でも一言くらいは言ってやらないと気が済まない。

「ひどいですね」

僕が言ったのはこれだけだ。挨拶程度の言葉じゃん。それなのに僕が立ち上がる前に大男は迫り来て、ああっ、と怒鳴るような調子のままに一発僕を殴打した。考えらんねえ、と思いつながら殴られてしまつて肌がひりひりするの事実。僕は起き上がろうとしていた体を再び坂に転がされてしまつて、みっともない醜態を晒されたということだ。

惨めな気持ちになりつつ、青白い街灯のぼんやりとしていくのがわかる…あんなにはつきりとしていた青が、にじんで分裂している……暗い……というよりか寒い……。

羽毛に身体を包まれていると思ったのと、ああ、何だか夢を見ていたけど何だったっけ、ということを持った時に、丁度ぼやけていた視界が開けてきて、意識の覚醒をわかる。殴られた所が腫れているので表情が張り詰めているのが自分でもわかる。ここはどこだ。

燈灯が一つ天井にぶら下がっていて、ギイ、ギイ、と揺れて錆によつて発生している音を鳴らしている。毛布を被せてもらっていて、寒そうだと思われて着せてもらったのだろうか、青色の上着を身につけてる。

ギイ……ギイ……。

しばらく燈灯を見上げていた。静かだ。そして揺れている、と思つた。別に錯覚とかふらついているとかいうことではなく、地面がゆさゆさと揺れているのがわかる。不思議に思いながら、この感覚は水の上か、と察して、そうだ気絶させられたのだ……と大男のシルエツトを思い出す。

何がどうなっているのだろう、水の上……湖の上だろうか、と見当がつくが、実際にそうかどうかはわからない。だが、ふと緑の蛍光を視界に捉える。円形の枠をしている窓から入り込んだ輝きだった。それがこの建物中の鉄の色を緑に染め上げて、どこか不気味だ。僕はベッドより降りてから、窓に近づき外を眺める。緑がまぶしい。ああそしてやはり、水の上、だ。

「ネリイ湖……緑色に発光してる……」

いや、そうではないかもしれない。ネリイ湖の水面が光っているのではなくて、その水の奥だとか底にあるものが力強い緑色の発光をしている、という風にも視える。もつとよく見たい。ここは水の上ということとは、船、とかだろうか。船内だとしたら甲板に上げられるな。

そう思いながら回りを見渡してみれば白色づけをされている錆

気味の梯子が目につく。この船内は古めなのだろうか、何かと錆が見受けられる気がする。

早くしないと緑の発光は終わってしまうかもしれないと思いながら足をかける。そして上る途中で、不思議なほどに柔らかな感触とぶつかった。

「ん」

「あ」

聞こえてきた戸惑いの声は明らかに女性の声だった。

女性の尻と顔からぶつかったらしかつた。しばらく奇妙な沈黙が続いた後、向こうから動き出して彼女は甲板に戻っていった。僕は呆然としていたがハツと気を取り戻して、だいぶ気まずいのでベッドに戻っちゃおうかなと思ったが、一度梯子に手をかけていた手前、それもおかしいので上る。

甲板に出ると夜風と緑色の発光を知覚する。

そして二つの人影を見て、あと、ここがやはり船だったのだという確認ができた。

僕は緑色の発光を一瞥だけしてから、さっきの気まずい出来事を謝るなりした方がいいと察して先ほどの彼女の姿、近い位置にいる人影に、声をかけようと思ったがどう言えいいのかわからなくて戸惑う。それでどうするか戸惑っている内に、無言の時間というのは過ぎていった。

緑の蛍光のせいでお互いの姿がハッキリと映されるというのも不都合だ。真つ暗なら気まずさも紛れたかもしれないが、僕の目から見て彼女の姿は映っているし、彼女から見ても映っているだろう。まあ、もう何言っているかわからないので、気まずさを含んだ会釈だけを試してみる。すると向こうから声を掛けてきた。もうさっきのことなどすっかり忘れた、という風な雰囲気だ。

「あの……痛かったですよね……」

僕の脳内は疑問に包まれる。痛かった？痛いってのは……ああ、そうか僕が殴られたことをこの人は言ってるんだ。となるとこの女性

はあの大男の親族、ということになるのだろうか。それとも仲間とか仕事仲間、まあ話してみないとわからないことだけだ。

「正直、驚きました」

僕はひそひそ声で、ちょい遠目の距離から緑の発光を眺めている大男に聞こえない程度の大きさで言葉を呟いたのは、先ほどの二の轍を踏まないようにするためだった。が、聞こえたのかもしれなかった。大男が、こちらに顔を向けたと思うと、ずん、ずん、という音が聞こえそうな雰囲気垂れ流して近づいてきて、僕の襟を掴みやがった。

「殴られてもまだ生意気だな、お前」

大男はまたも拳を振りかぶりやがった。何だこいつ狂人か。

「やめて。この人、多分何もわかってなかった」

お、女性が叫んだ途端に振われそうだった拳が止まった。何これこの人に感謝。

やっぱり仲間とかなのだろう、大男は彼女の言葉に従って僕の襟を離してくれた。僕は自由になったので襟を戻してから、とりあえずいろいろと状況を理解したいとは思っただけけど、どこからどう訪ねていいものか。でもやはり気になるのは、今も光り続けているあの緑の蛍光。

大男に対しては顔も見たくないくらいに怒りがわなないているので、顔を彼からは背けて、その女性に尋ねることにする。あれはなんなんですか。

「お前、あれを、わからないってのか」

大男が隣から驚いた調子で口を出してきたが、とりあえず顔を見たくないなのでシカトしたのだが、隣からでも彼がシカトされたことできり立ちそうになっていることがわかる。ああ、コワッ。女性の方はまたブチギレそうな大男を軽く睨みつけてから、しかし緑の蛍光について知らない僕にたいしては彼女も驚きを隠せないらしい。

「久しぶりに見ました……。あなた、咎を犯した人」

「え」

「わかってないんですね。右腕の袖をまくってみてください」

言われた通りに捲くってみた。着せてもらってる上着と長袖の袖を捲くってみる。捲くる途中、この服貸してくださいとありがとうございませう、などと礼を述べる余裕さえあったというのに捲くってから僕は生唾をゴクリと、呑むことになった。人面瘤……？緑色に染められている、しかも発光している、あの光と同じ色の人面瘤が、右腕の中ほど辺りに、たしかにある。何で僕は今までこんなに大きな人面瘤を放置していた……。

「咎を犯した人には、この世界に落ちた時にその瘤が付くと言われていきます。本当は無限牢獄に囚われているはずなのに、どうしてかあなたは、世界を歩いてる……。」

咎：犯罪者、ってことだろうか。そう言えば仮面の人も言っていた。犯罪者なら牢獄にいたことも納得がいく。でも、世界を歩いているのがおかしって？僕は乙だから甲を歩くのは別に、そこまでおかしなことではないのだが。まあそんなことは今は、どうでもいい。

僕は慌てて右腕の袖を戻した。で、今のは無かったことにしたいなと思うけれど、全身から発汗が止まらないし、つうか無かったことには出来ないレベルの光景だった。何、今の、っていう衝撃。

単純にまず心配したのは、病気ということ。つまり自分の身体が人面瘤が原因でどうにかなくなってしまわないか、死ぬのではないか、という本能的な危機感だ。何せ湖を光らせている怪しげな光と同じ発光をしている人面瘤なのだから、かなり得体が知れない。

僕はとりあえず湖の発光の原因を教えてくださいたく思い、彼女に尋ねてみる。

「僕には記憶がないんです。そしてあなたの言うとおり咎を犯した人、なのかもしれない。でもこれは信じてもらうしかないんですけど、僕には本当に記憶がないから、湖の中で発光してる緑だとか、いまついていた僕の瘤のことも、何にもわからない。教えてくださいたいんです、差支えなければ」

「記憶がないんですか……」

「はい」

「で、今まで牢獄に囚われていたということは、この世界のことも何もわかっていない……？」

「そうです。で、犬少年に助けられて」

「犬少年。ああ、ということはあなたは……」

「え」

「いえ。犬少年はある人に遣われている身です。この都市で走り回る犬人間の類は全て、その人に遣われているんです。その犬少年に助けられたということは、あなたはその人の所に早く行った方が、この世界のことを様々、教えてもらえるとと思います。私では、上手に説明できるかどうか……」

「じゃあ、せめて湖のことだけでも、教えてもらえませんか。あるいは、この瘤のこと、もしくは咎について」

「私に説明できるのは湖のことくらいです。このネリイ湖だけでなく、この世界の全ての湖はこのように、緑とは限りませんが、蛍光する」

「蛍光する……」

「そして生まれてくるんです。この世界の象徴、繁栄の三日月に影響されて他の世界から引きずり出されてくる……」

「他の世界……？ 繁栄の三日月……？ 影響って……」

「ほら、見えてきました。浮かび上がってきました」

「何だ、あれ……」

「私にもまだわかりませんが……めずらしい……かも……！」

「レアってことですか？」

「そうかもしれない。あれは……すごいもの、その気配がありますね！」

先ほどまで、緑の蛍光色に染まっていながらもネリイ湖の水面は静まり返っていて、例えば”音”、なんて一切鳴らずにただ発光だけが凄まじかったのであるが、これは何かしらの反響効果なのだろうか、壁を幾重にも反射して……例えば牢獄で音楽を流して聞いている時に感じた三百六十度からの音の洪水……。そうだ僕はこういうサウンドな音の回転で、音には何かしらがあると思っただけだ、そう牢獄の中にいる時に……ああ、もう忘れたな、っていうかこの音は頭皮や身体に染み込む感覚……びりびりと電流のように全身の表皮を震わせて、鼓膜を突き抜けるような錯覚を味あわせる……

…たしかにすごいことが起きる前兆か……………。

僕がそう思った時に鼓膜を突き破るような音の感覚は、キィィィイ
キィィィィイというすさまじい耳鳴りに転じて、状況がよりすこ
くなるのがわかる。思わず両手で耳を塞ぐ。大男と女性もそうし
ていた。そしてキィィィィィィィィィィと共に水面が揺れ、崖下で波が
しぶきを上げるかのような勢で湖が荒れ始めた。波しぶきは白色を
緑の蛍光に紛れながらも主張し、僕の視覚と聴覚が捉える情報は凄
まじい何かが起きることを脳髄に予感させる。

そして荒れ狂う湖の中から、水をその身に纏いつつ何かが上がっ
てきた。水底から…………… あれは、僕の目からは、なんとさえばいいの
だろう…。

「あれ……………」

湖の中からそれが浮かび上がってくる。

考えられないことだ。

「人形、か」

「いえ、実際に人……………」

僕はどちらの回答も違うとわかる。そして僕はあれを知っている。
金の粒子がざらざらと脳味噌の中を洗ってくれるような錯覚が起
きた。いや、錯覚だったろうか。今僕の脳味噌から記憶が一つ、呼
び起こされたようだ。これは、どういうこと、だ。世界…………… そうだ
この二人は、アレ、を知らない。皆が知っているはずのアレを知ら
ないということが、僕のノイズがかつた記憶を呼び起こしてくれる
かもしれない。鍵となつて。

人体強化のためのパワードスーツ、B a b e l・あれは僕らにと
つて大切な道具であり希望を託す対象でもあつたはず。希望と絶望
の狭間で揺れ動く世界に希望を拡散させるために人に力を与えてく
れる発明、また戦乱をより激しくすることにも一役を買つた……………で、
僕は今これをこうやって知識を思い出してみた、記憶を復活させる
ことができたけど、何も嬉しくはないな、感情は何も湧き立たない
なつて感じだな。ただ眼に見えたり、耳で聴こえたりこのネリィ

湖の光景は、圧巻だなと感じれるけれど。まあ、思い出した記憶はたった一つだから、そう興奮もしないのかもしれない。全ての記憶を思い出した時、僕は感動するだろうか！。

「ありや、鉄で出来た人形か何かか？」

「鎧……とか、そういうものにも見える……黒？ 緑の発光に混じって色はよく判断がつかないけど……」

「黒じゃないか。そう見える」

「そうかも」

「どうにしろ始めて見るものだ。船を近づけて回収するぞ。あれは高く売れるかもしれないな」

「ええ、そうね」

耳鳴りは止んだ。緑の発光はまだ続いているが、波しぶきが上がるのも終わって再び静まり返ったネリイ湖。緑の蛍光が薄くなり多少暗くなった船上にて、二つの大小、身長と横幅に差のある影がは忙しく甲板上で作業を開始し、船を緑色の蛍光のあるところに近づけていく。近づけていく途中で、作業をしながら吠えたくる大男ありえねえだろ、って呟きなくなるくらいに大きな声を張り上げているが、よく聞いてみると、こちらに話しかけているみたいだった。野生の獣か何かなのだろうか、興奮を包み隠そうともしない大声は、野蛮人成分百%。

「今日は実にラッキーだぞ、おおおい！ ネリイ湖のここら一帯は俺たち兄妹が任されている縄張り……生意気なお前も、それから卑劣な横取りが得意な糞野郎どもも、この俺たちの縄張りのド真ん中の位置で蛍光が起きれば、邪魔をすることなんざ出来るはずがねえんだ！ あれを老いばれに献上して、報酬は俺たちがたらふくいただけることになるんだぜ！ ざまあみやがれよ！ どいつもこいつも、悔しがることになる！」

……うるさい。

Babelを誰かに売り払うつもりらしいが、はたしてあれはそんなに売れるものなのだろうか。この社会は、さっきの都市の様子

から窺うに文明レベルがかなり高いように思える。僕が理解していた都市というものとはかけ離れた都市の姿を、さつき見せられた。そういふ文明の中でB a b e lが価値あるものとして扱われるかどうかは疑問だ。ていいうか何で湖の中からB a b e lが浮かび上がってくるのか、ちつとも理由がわからないな。

「いやっほおおおおう！ おうおうおうおう、妹よ、あの向こう側で止まってる船が見えるか！ あいつらマヌケ丸出しで呆然としてやがるぜ！ 緑の蛍光に誘われてやってきたんだろうが、ああ、残念だろうなあ、悔しいだろうなあまったくよお阿呆だなあ！ ああ、まじで良い感じだ。良い予感がするぜ、俺は興奮してきた、俺はめっちゃ興奮してきたぜええええ！」

うるさい狂人は自分が興奮しているということを自覚できる程度の脳味噌はあるんだな、と思う。発狂寸前とも見えるその大男、兄妹の兄の方、その発狂ぶりを一瞥することもなく作業を黙々とこなしている妹さんの方は、実に冷静な調子でそれに打ち込んでいる。まあ、あんなノリについていくのは面倒だろう。作業で気を紛らわすのが正解に違いなし。

「すみませんね、うるさくて」

途中僕に謝ってくる。妹さんの方は常識人だ。よかったよかった。二人して狂人では僕も、何だか同じ船の上にいることが不安になるって話。

「あの、本当に兄が申し訳ないことをしました。本当に、すみませんでした」

彼女が作業の手を一旦止めてから、謝ってきた。

いえ、と僕は言う。それ以外に言葉が思いつかない。彼女は頭を上げない。そんな彼女を兄が背後から叱咤する。なにやってんだ妹おう、などと絶叫しながら激しく作業をこなしている。大丈夫だろうか、頭脳。

やがて船は緑の蛍光のその中心地、つまりB a b e lの宙に浮かんでいる所に接近し、そして停止した。兄は歡喜の叫びを繰返し、

妹は落ち着いた様子。二人は水面に網を放り投げて、Babelをそれに引っ掛けると、甲板に引き上げて、回収した。

船上に上がってきたそれを僕も眺める。眺めれば眺めるほど、僕の脳内に金色の粒子がざわざわと蠢いて、記憶を提供してくる。Babelの第四試作型、企画時の名称はOmnipotent. どのような状況、環境においても戦果を上げれるよう最新鋭の技術をこぞって投入するというコンセプトの元製作された、最後のプロトタイプBabel。しかし、製作の途中にてBabel計画の縮小が決定、それによって万能の神として崇められるはずだった第四試作型は、Master of none、略してMonという蔑称を与えられた。黒と青の装甲を持つパワードスーツ。一度人間がそれを装着すれば、人としての実力を遥かに超えることができ、力を得る。そのための道具。だがその不幸たる失敗作、第四試作型のBabel、Mon.

無くした記憶の隣辺として、見た途端にこのBabelに関する情報が湧いてきた。この都市に住んでる人間はBabelのことを知らないらしい。だが僕はこれを知っている。

何故僕が知っていて、彼ら彼女らはBabelを知らないのか。おそらく世界が違うから、ということ、だろう。犬が自動車の代わりに走り、オブジェのような信号機が立ち並び、湖から道具が浮かび上がってきた奇妙で、滑稽だが、独創的でもある世界。こんなのは僕の住んでた所とはどう考えても別世界だ。

「変な話だ」

と僕は呟いた。

大男がはしゃいでいる。変な踊りを踊っている。笑い声がやかましい。

「もしかしたら私たちの邪魔をする者かもしれないという可能性が捨てられなかったので、あなたを船に乗せていたんです。眼に付くところに置いておけば安心かと思って…それに気絶していましたし…あの、本当にすみませんでした。すぐに、陸に戻りますので…

…」

妹の方は本当に礼儀正しいと思う。正しすぎるくらいだ。まあ、この兄妹の場合はこれでバランスを取っているということなのかもしれない。

彼女はにこっと微笑んでみせる。作り笑いだと思えるが、良い笑顔だな、と思った。

あの兄妹はテスタという名を持つそうだ。テスタ兄妹。

僕はテスタ兄妹たちの主に妹だけと会話をして、別れの挨拶をして、船から降ろしてもらった。

あの香りの強い花はテスタ兄妹の湖内での縄張りを示すために置かれている一輪なのだそうだ。だから僕はテスタ兄の鬻ぎを買ってしまったらしい。にしても花なんていう脆いものを縄張りに利用するだなんてどうかしてる。ただ僕は妹さんに恨みは無いので、そのことは喉に押し込めたまま B a b e l とネリイ湖に別れを告げて、坂を上っていった。陽がもうすぐ登りそうな気配、夜が少しだけ藍色を強めてきている。僕はどれくらい気絶していただろう、犬少年は……。

高くなつた坂の天辺で、僕はそこから一望できる三百六十度を見渡すことで、犬少年がいないかなと期待する。でも彼は見当たらない。その代わりに白髪：真っ白な髪の毛をした男性の姿がまだ薄暗い藍色の中で、見えた。それなりにがっちりしているが、テスタ兄とは違ってどこか紳士的とも言うのだろうか、雰囲気からして話しがいろいろ通じてくれそうな礼節のある方なのではないか、と窺えた。見ただけでそう思わせるのだ、話してみればもっとその人から礼節を感じるであろう。かなりの紳士であろう。

その紳士は向こう側から歩いてくる。坂の上をずっと暗い向こう側から歩いてきたのだろうか。丁度良い、この人にものを訊ねれば親切に対応してくれるだろうと思つたので、犬少年を見たかどうかを聞くことを試みる。見かけませんでしたか、人を乗せていない犬の少年を、と。

そう白髪の彼の雰囲気は実に紳士的だ。服装もどこか落ち着いた風なチエックのシャツを着ているし、近づいてきて見えた彼の瞳の色は茶色で、何だか渋い。そんな彼なのだ、僕の質問に快く対応し

てくれるに違いない、犬少年を見ていないとしても、人を探すなら
こういう場所が良いですよとか機転を利かして親切にも良い情報を
教えてくれたりするに違いない。…と、予想していた。

が、彼は僕の訊ねをシカトして、すっ、と軽やかに通り過ぎてい
きやがった。

な、なにに。

全然紳士違うじゃん。全然真摯な対応してくれないじゃん。

驚きつつ悔しがりつつ、僕は通り過ぎていった石像のようにガツ
チリした背中にもう一度声をかけた。だがやはり彼はぼつぽつと坂
の天辺を歩いて進んでいき、何も僕に返事をしないまま背中を小さ
くしていくのだった。僕は少しずつ明るくなっていく夜の中で自身
が否定されたような感覚に襲われて、朝日が昇らなければいいのに
と何故か思った。不親切な対応をされると嫌な気持ちになる。こう
いうことがわからなかったら、社会は黒ずんで死ばかりが横行する
ようになるんだ、失敗ばかりが横行するようになるんだ、それが連
鎖して社会は最悪に住み心地が悪くなるんだ、だから僕達は親切を
心がけなければいけないのが本当なんだきつとそうなんだ、なのに
白髪の彼は普通にシカトした。鹿十した。今度あの男を見かけたら、
拳を振るってやろう。いや、返り討ちに遭うのは嫌だけどね。ああ
驚いたわー、悔しかったわー。

テスト妹の笑顔でも思い出して気分を良くしてみよう。あ、もう
どんな顔だったか忘れかけてる。必死に思い出そう。あれはいい笑
顔だったから。そうだ昇り上がる朝日のようにね！

僕は馬鹿みたいな思考をしつつ、白髪の彼とは逆の方向に坂上を
歩いていった。高い所を歩いていれば犬少年も僕のことを見つけや
すいだろうと思ったからだ。まあ、犬少年がまだ僕を探しているか
どうかはわからないのだけど……だって、気絶して、起きて、もう
すぐ朝日が昇ろうとしてるんだもん……しかし犬少年くんはわざ
わざ牢獄から僕を引っ張り出してくれたんだから……きつとまだ探
してるよな……案外、逃げちゃった方が僕にとって都合が良かった

りして。

「わからないことだらけだもんな」

一人ごちた時に、丁度日の出に頬を照らされた。丸くて、情熱的に赤い昇り上がる太陽は、僕の知っている世界と同じ円形をしていて、万物に色彩を与える光を提供する。僕も色彩を与えられているだろう。

見下ろせるネリイ湖も、黒かったのが、明るめの藍色という色彩を光によって与えられていた。テスト兄妹と僕が乗っていた錆の多い小船がここからでも見える。小船の上でテスト兄妹は *B a b e l* を包装などして、買ってくるところに運ぶための準備をしているらしく、相変わらず忙しく動き回っている。野太いテスト兄の声、離れた位置になったここにもよく聞こえてうるさい。花の香りも届かない位置にも来たのに聞こえるのだ、テスト妹はよく耳が潰れないものだと関心したくなるね。

遠くに見えるテスト妹の顔がわずかに見えて、彼女の顔を僕は思い出した。

朝日に彼女の笑顔が重なって、僕はゾツとした。何故だかわからないけど、ゾツとした。朝日を眺めるのはしばらくよそうと思わせる程、何か自分自身の個性だか何だかが、顔を思い出したことと朝日が重なることを否定して。で、僕はまた歩き出して、それから長いこと歩いた気がするけど、時間のことは気にしなかった。どれだけ長いこと歩いたのかは、わからない。でも三十分は間違いなく歩いたな、と思う。ずっとネリイ湖が左側にあつた。朝日が昇り、暖かい日光。途中すれ違う人々は都市の中心地にいたころよりもみずばらしい姿である人が多くて、やっぱり、こういう所もあるんだなと僕は納得するのだった。浮浪者、貧乏そうな人、不機嫌そうな人……。

「ああ………」

集団暴行が目についた。ネリイ湖側とは反対側の、つまり右側。僕から見下ろせる位置の前方にて明らかに多人数で一人をぼこぼこ

にしている光景が見えた。何故あんなことをしているのか、理由は分からないが見てて気持ちの良いものでないことは間違いない。Babelがあればな、と僕は閃いた。でも直後、聞こえた。金の粒子が僕を諭すかのような声が聞こえた。

『お前が発明したのではない』

その声を聞いた途端に気持ちが暗くなった。

そしてそういえばさっきの不親切な、がたいの良い男もあの集団暴行を見ないで通りすぎたのだろうな、と想像してみた。想像してみたら、僕は阿呆らしくなった。あんなに肉体の頑丈そうな奴が手助けをしないのに、牢獄に閉じられていた僕があなほこぼこにされている人を助けられる訳がない。僕の役割じゃない。言い訳かな？僕は足を止めなかった。集団暴行の側を眺めないようにした。途中、『助けて』と聞こえたような気がした。それが幻聴なのか実際にその人が言った言葉なのかは、知らない。

僕は坂の上を、歩き続けた。

「結局、何処に行っただって、変わらないものは変わらない。そういうことかな」

何処に行っただって、と僕は思っている。そうだ、記憶はなくとも都市というものがどういうものであるかとか、人間がどういうものであるかとか、言語のことだとか、音楽、金色の粒子、そういうことを僕はわかっている。個人的な記憶という奴は思い出せないけど、変わらないものは変わらない。そうだ僕のいた世界でも集団暴行は溢れていたし、ああそうだ、僕らの世界はここよりもひどい不完全ぶりだった。人は争って、争って、争っていたはずだ。

馬鹿丸出しで。否定をして。信じることをせず。疑い深く。ただ保身だけをせざるを得ないと決めた人たちの、いかに多かったことか。僕はそれを知っている。覚えている。薄汚いんだ。

…そうだ、確かBabel。僕は……。

立ち止まった。脳髓で粒子たちが忙しく動き始めた。ぐるぐるぐるぐると小魚の大群が水の中で泳ぎまくっているようなイメージ。記憶が再生されようとしている。復活する。映し出されるのは白衣を纏った人、研究者、あるいは黒いスーツ、そうだBabelを…

「ようやく見つけましたあああああッッッ！ ずばあああああああんん！」

背後からの衝撃。突き飛ばされて身体の姿勢を崩されて、よたよたしてたら、団子虫みたいに坂を転げ落ちる醜態を晒すことになっていてててつ、という感じで突如すぎる展開に混乱したけれども、転がるのがようやく終わって、坂下から坂上を見上げると、息をせーはー、と肩を激しく上下させている犬少年の、犬耳のびくびくし

ている姿、尻尾がぶんぶんしている姿、が僕を睨むような目付きで見下ろしていた。…犬少年、やはり探し続けていたのか。少し驚く。彼は坂下にごろごろ転がった僕を引っ張り上げて後に、こう言った。

「いやー、ほんと見つかった良かった。急がないとマジやばいで、さっさと背中に乗ってくれませんか？ 全速力で飛ばしますけど、吐きそうになったら道に吐いてくだされば結構ですから」

僕は青ざめた。吐くこと前提のスピードを出すのかよ、と訊ねたかったが、犬少年の目付きがかなり真剣なので反論ができない。

彼の皮膚から茶色の毛が生えて、二足で立っていた身体が骨格を変えることで四脚に転じ、人間の顔をしていた彼は犬そのものとなる。茶色の大型犬、だ。大人一人を背に乗せて走ることが出来るほどの、体長一・五メートルは超えていそうなの。

「早く乗ってくださいよ。糞野郎」

などと悪口まで言うてくるのでムツとしたが、よっぽど彼は怒っている様子に見えた。あるいは急いでいる。ここは大人しく従うしかなさそうだった。吐くのは嫌だなあ……。と思うが愚図ってばかりの餓鬼でもいられないので、僕は彼の背に跨った。

そして跨った瞬間にあり得ないほどの縦揺れと横揺れ、僕はすぐに気持ち悪くなって、おええ、と出てしまったが余計に速くなった。容赦ないねえ、と怒りたい所だが怒る前に僕は吐いてしまった。逆流と嗚咽。こうして嗚咽無限地獄は始まった。その記念すべき第一回目の嗚咽だ、なんてその時僕は考えることができなかった。余裕がなかった。全ての思考を停止させられるほどの圧倒的不快感を与えてくる乗り心地。僕は犬少年を呪うことも、怒ることも、恨むこともできなかつた。

「うわああああああん」

何故だか、犬少年は走っている間ずっと絶叫していた。走りながら絶叫しているのにスピードがより加速していくという不思議。で、僕はずっと吐き続けて、すっかり屍のごとく疲弊してしまった僕が

落ち着くのはそこから三十分後のことになる。

たしかに到着は速かった。二時間で着くはずとか言ってた場所に、三十分で着いたのだから。

僕は犬少年から降りて真っ先に、ふらふらと地面に倒れてからゲロした。

涙がぼろぼろで、身体がくたくたで、服も汚れて、気分が最悪だ。でも僕は知らなかったんだ。この時、犬少年の方が気分は最悪だったに、違いなかったり。

彼ら犬人間は消耗品でしかないということを知り、世界にやってきたばかりの僕はまるで知らなかったから、彼がどうして「うわああああんん」などと圧倒的な走りを見せたのか理解できなかった。彼だけでなく犬人間は全てそうなのだった。すぐに代わりが利いてしまうから、すぐに捨てられてしまう。僕は知らなかった。可哀想な犬人間の現状なんて、甲を歩き出したばかりの乙にはわかるはずがない。僕は所詮、牢獄に閉じ込められていた犯罪者、そういうことだから。辿り着いたのは館。ド派手で、うわ、芸術ですね、という感想を百人中八十人くらいは言いそうな、残りの二十人は啞然として口を閉じられなくなるような。そんな館が寝転がったまま起き上がれない僕の前で、聳え立っている。と表現したくなるほど、巨大。館、というよりかは、四角い箱、という見た目に近かったのだけれど、犬少年が「館に到着しました」などと言ったから、僕はこれを館だと認識したのだ。

形自体はただの立方体。しかし装飾がすごい。あれは彫り込まれているのだろうか、どういう造りをしているのか全くわからないが、描かれているのが何であるかを知っている。あれは終末の時を描いているのだろうか。彫っているのだろうか。ならばこの館の主は終末を好む者ということ？人の悪癖が暗雲を生み起こし、神の怒りを買って、現世に悪魔を呼び起こす不幸の最たる時。その様子が始まりから終わりまで描かれているその彫刻が、立方体に万遍なく描かれているように見える。僕の目線から見えない位置に彫刻が為されているか

は、確認ができなかったが。

庭は広い。門もでかい。使用人と思わしき風体の、白黒の服を着た男女が忙しなく道を行き交い、そして犬耳を生やしたそういう者もたくさん見受けられる。

テスタ妹の『犬人間は遣われている』という言葉を思い起こす。この館の主は大金持ちであることは、まず間違いない。犬人間は都市に住まう人々の多くに利用されていたことを見れば、その見返りが館を大きくし、庭を広げたということだろう。僕は立ち上がったから館をわずかに見ただけだが、圧巻される。正直、怖気づいた。怖気づく他、ないだろ。

嫌な感じだ。僕の目の前で聳え立つ巨大な館は、人から人に向けられる侮蔑、その象徴だと思えたから。黄金が目立つ配色が、そう感じさせるのか、大勢の人間と犬人間が館のために駆けずり回っている光景を見せられて、そう感じさせられるのか。

僕は嫌なところに連れてこられたと、自覚する。

「遅かったじゃないか、主がお待ちだぞ」

多くの者から挨拶をされながら庭の奥より現れた人物は、干からびたミイラだしか見えなかった。僕は口をポカンと開けてその人を眺めてしまつて、それに気が付いたミイラは僕を鷹のような鋭い、つて感じの目で射た。僕は慌てて目を反らした。

犬少年が偉そうなミイラの言葉に頷いてから、

「お役御免ですね。これにて。ひゅーひゅひゅー」

と言つた意味を、僕は深い意味に取る事をせず聞き流していたが、この時犬少年はひどく恨みがましい目で僕やミイラ、館、その周辺にいる人々、を見ていた。口笛を吹いて軽い調子を演じていたが、彼の心底はひどく絶望していて、その絶望に付随している怒気を周囲に目線で訴えていたのだろう。僕は、馬鹿だから知らなかった。

それで、僕は犬少年が何時の間にもその場からいなくなったのか、分からなかった。

彼は僕にもミイラにも挨拶をしないまま、どこかに消えた。いや、

消えたのか連れて行かれたのかもわからない。僕は彼が消えるその時を、絶望へと引つ張られていくのを、気が付くことすらしなかった。

「さあ、こちらへどうぞ。我々の配下の者がお手間を取らせただよ、失礼いたしました。主がお待ちです。私の後についてきてくだされば」

「はい」

僕はそう言われたのでミイラのように活力の無い、老いた執事、といった男の背後について歩いた。この時になってようやく、犬少年が見当たらないことを認知する。

でも、特に気にもとめない。

また会うこともあるのだろうか、と思考していた。

犬少年は廃棄処理場に送られて燃えるゴミとして投棄されて二度と現世には帰ってこないという、そういう処置を為されたということを知ったのは、この館の主に会ってからのことだ。そして僕はまた新たな犬少年と出会う。見た目などほとんど以前と変わらない、クローン、或いはドッペルゲンガーという言葉がぴったりな、姿形の変わらない再生された犬少年。でも投棄された彼と新しい彼は別の彼だ。記憶は削除されているらしいから。

僕は館の主と出会う。

老いた臆病者さ。こんな館に住んで、王座にて座り、奇抜な部屋で守銭奴をするしか脳の無さそうな、意気地を完全に無くした老人さ。

でも僕は実質、彼の指示のおかげで牢獄から引つ張り出されたとも言えるんだ。

僕を牢獄から実際に出してくれた犬少年はもう投棄されてしまったのに、指示をしただけの老人に感謝しなきゃいけないのだとしたら、いや、僕は感謝しない。

僕はその老人に、魅力を与えられなかったからだ。

豪華絢爛の至りと呼べる館に踏み入ってから、老人と挨拶程度と
いった会話だけを交わし、僕は客人として持て成しを受けた。館に
従事する者が芸を尽くし、そういえばいろいろありすぎて忘れてい
た空腹を思い出された。黄金の食卓に座って、でも僕はがむしゃら
とはいかず、様子をつかがいながら空腹を満たすために、手を動か
し、口に料理を運んだ。ばりばり、ばりばり、と喧しい音が鳴った
時、黄金の食卓は静まり返っていて、僕はその自分のばりばりと鳴
らす音を意識させられてしまうのは心地が悪い。僕を客人としても
てなすなら、そういうところにも気を配ってくれば良いのに、と
考えてから絶望した。人ってこんなに簡単に甘えるようになってし
まうんだ。

僕は黄金の食卓から立ち上がり、言わなければならないことを、
近くで突っ立っていた綺麗な執事風の男に言った。

「僕には知らなければならぬことがある。世界のことや、あと、
これのことだ」

僕は右腕の袖をまくって人面瘤を、見せ付けた。

さっきまで芸をしていた人や、コックと思わしき人など、多くの
従事している人間や犬人間が空気のように屯しているこの部屋で、
僕は人面瘤を見せ付けたことによって目立っただけだ。…人面瘤だ、
人面瘤：という人々の呻きを確かに耳で察知したのだ。

綺麗な執事は息を呑むような震え方をしてから、後少々お待ちく
ださい、と確認をするためだろうか歩を進めて部屋からいなくなる。
そして数十分後まで執事は帰らず、僕は黄金の食卓で相変わらず
ばりばり、ばりばり、と噛み潰す音を目立たせなくてはいけなかつ
た。人間たちの空気のような佇まいの中、ばりばり、はまるで恥ず
かしいし、生きているのが嫌になってしまふ。嫌気が刺して食べる
のをやめると、することがなくなってしまうって、犬少年、サトと会

話して暇つぶしできたらな、と思うのだが彼は見当たらない。そう
ださつき彼はお役御免、と言っていたのだったと思い起こし、退屈
に囚われるしかない諦めて、目を閉じて金色の粒子と遊んだ。

やがて綺麗な執事が戻ってくると、僕に告げる。

「主が、お話ししましょうと申しました。ついてきていただけますか」
僕は黄金の食卓で、金色の粒子と遊んでいることで満足する、と
いうことはない。

「YES」

ふざけた回答の仕方をして、僕は開眼した。

黄金の食卓には、大きな海老を焼いたもの一匹、奇抜な味わいを
もたらず卵を抱えた魚、鯨を小さくして小魚のようになったもの
揚げ物、緑色の液体の香しいやつ、棒状のぷるぷるとした甘味のある
もの、そして最後に食べられるのを待っているような爽やかな色
遣いをしている平べったい果実。僕は人面瘤のことを知らなくては
いけないし、世界のことを理解しなければいけないから、黄金の食
卓の全てを腹に入れることはせず、老人の根城であるような、奇抜
な四角い部屋に綺麗な執事の案内の元、足を踏み入れた。

綺麗な執事は、軽やかなステップを踏んで僕の前方から背後に下
がっていくと、その下がっていくままにソノ場所から出て行った。

翡翠のルーム。翡翠色の宝石が埋め込まれている壁や天井、床を
持つ、不可思議な力でキューブが浮かんでいる、そんな場所。それ
が老人の根城だった。意気地無しのこと……。

僕はまだそのことを知らない。

自身が犯罪者ということと湖が蛍光するということ。この程度し
か僕は知らない。

老人は、最初に挨拶のような軽い会話を交わした時には、気が付
かなかつたが、彼ではなく、彼女、らしい。老人というよりは、老
婆、ということだ。彼女は派手な装飾に身を包み、青紫色のキュー
ブに乗ったままその玉座に腰を下ろしている。そして、

「この部屋にはルーピックキューブにあるような色彩は何一つ無い」

と独り言を呟いた。僕は訳が分からないのでその言葉をスルー。つまり返事をしないまま、老婆が何かしら言うのを待ってみる。余裕があるように見せないと、足元を掬われていいようにされるといふ危機感があつたから、相手から話させようと思案、した。ルーピックキユーブなんて、そういうえば僕は並べるのが無理だと幼い頃に…… ああ、あやふや。記憶つてあやふや！。

老婆の指は枯れ木の枝のように細く、その動くのが不思議なほどの朽ち果てている指を、彼女は一差し指から小指までを順番に動かしてくねくねしている。ただ、やはり枯れ木であるから、やつとこさ、という雰囲気。老婆は玉座より立ち上がると、派手な黄金色のアクセサリーを煌かせることで枯れ木をごまかしているが、老婆は、やはり老婆だ。…老い。

老婆は青紫色のキユーブから風のように軽やかに降りてくると、僕の前に立ち、教えて欲しいことは全て教えて差し上げるさ勿論、と隙間風のような声付きで言う。

僕は執事にやってみせたように、袖を捲くり、老婆の落ち窪んだ瞳に人面瘤を見せ付けるようにしながら、

「僕はこのことだけではなく、僕の知らないほとんど全てを教えてください。落ち窪んだ目が悪くて眠ることさえできません。落ち窪くことができません」

こう主張した。老婆は案外、素直なもので、首肯すると、己の身につけているアクセサリーをわざと主張するような、そういう嫌味のようなものが含まれた動作を惜しみなくする。彼女のプライドそのものがアクセサリーを身につけている自分に、集約されているのか、そう想像させられるほど主張の濃い、よくわからないが印象深い動きをする老婆なのだった。

そういう彼女は、首肯したにも関わらず、「教えるよりは、経験するほうが早いだろう。見聞きする方が早いだろう」

と言った。僕はいらつく、と思った。だが、はやる気持ちを抑え

て、ここは老婆の言う通りに従った方が事は案外、近道なのかもしれぬと思ひ直して、僕は首肯を返した。すると話は本当に早いもので、その十分後には二十匹くらいの犬人間と、その背中に跨る二十人くらいの従者、それに囲まれて僕は甲の世界を知るための、外出をしていた。犬少年ではなくて黒い犬の背に跨って、僕は陽が昇り上がっている昼を、道を、都市を、駆け抜ける。

その途中で出会ったのが、顔の無い天使。

この世界を八十年周期で破壊するために作られる、災害。

灰色のローブで二メートルはある全身を包み、足がついていなくて幽霊のよう。顔があるのに目鼻口、耳さえもない、のっぺらぼう。背中に半円の形をした羽のようなものを付けて、突如として都市内に現れ、物を壊し、人を殺す。それが、顔の無い天使の役割。秩序を象徴とする仮面の人とは対照的な、破壊を象徴とする存在だそう。

そして僕の人面瘤は、顔の無い天使の血を啜る。

それがどうにも、僕が牢獄から出されたことや、人面瘤の意味、そして老婆の目的。この世界の法則。老婆の言っていた、ルーピックキューブ。

全ては関連していることだ、と都市の中で僕は老婆に教えられる。そして今、僕の目の前には顔の無い天使が浮かんでいて、僕を見下ろしている。

殺さなければ、お前が殺される。老婆は平然と僕にそう告げた。

芸術的な都市であるそこは、夜の時分よりも昼の方がどこか寂寥としていて、人通りも少ないように見える。

あんなに点灯していたオブリジェと見紛う信号機も、発光が昼の陽光に包まれて、夜の時よりも主張をわずかにしているような。

ただ、今はそれを気にしている場合ではない。そういう時ではない。

乾いた風を身に受けながら 顔の無い天使 を見上げる。久しぶりの緊張感だ、と脳髓が喚くので、ああ戦いということに僕は昔していたのかもしれない、でも殺し合いをしていたのはわからないよな、と天使を見上げながら思う。こんな天使があつてたまるか、天使とは人の顔をして微笑むとされる安らぎの象徴ではないか、と僕は心の中で反対意見を唱えつつ袖を捲くつた。たしかに人面瘤が普段より腫れ上がっている。ぼこつとしていて、ああ蛍光している赤色に。湖の時は緑だったが、今は赤、赤、まぶしい点滅が目にも優しくなくて、やはり僕はこの人面瘤は好きになれない。身体に悪そうだと本能的に感じさせられる、そういう瘤だ。この瘤が嫌いだ。「この世界に住まう限り、何処までも、何時までも付きまとうのがその瘤だ。それがお前に力を与えるのだから、源となるのだから、頼りにするといいい。それで 顔の無い天使 の蛍光する液体を啜るが良い」

背後で控えて犬に跨っている老婆が、まったく平然とした声音で言うてくる。

他人事だろうが、僕はこんな瘤嫌に決まっただよボケナスが、と絶叫したくなる混乱に襲われる。でも闘争心は滾る。おそらく八つ当たりをしたいと思っただのだ。ただやはり 顔の無い天使 はその幽霊のような佇まいが不気味で、何をしてくるのかわからない。

とりあえず武器がなければ戦うことはできない。
それに……。

「人質のつもりなのかこれは。これは人質ですか、人面瘤が光ってるからって勝てないじゃないですか！ 人質もいて、武器もなくて、顔の無い天使 なんて初めて見た！」

最悪の状況じゃないかと感じる。

気を失っているらしき男性が一人、顔の無い天使 のすぐ頭上に浮かされていて、何時でも殺される準備は整ってますよみたいな全身が真っ赤に染まっているのは、あれは酔っている？酒のせいで赤くなったというような紅潮。全身が赤くなるのはあまり良くないことらしいが、まあ酒の話はどうでも良い。まだあの人は生きているように見える。なら僕はあれを……というか、どこかで見覚えのある姿だと思っただけ目を凝らせば、ネリイ湖の坂上で出会った、僕をシカト、鹿十、していったチエツク柄シャツを着ていたがたいの良かった男ではないか。

何故、顔の無い天使 の頭上でぶかぶか浮いているなどという醜態を晒しているのか。

屈強そうで知的な印象の人であったのに、酒によったせいで捕まってしまうとか、そういうことだろうか。人をシカトするような不親切 GUY は放っておいてしまおうか。てかその前に武器とかなかったら僕も人質にされる、あるいは、殺されるなどしてしまうのは、嫌だ。

ならば、これを食べさせるのだ……。

老婆の隙間風 voice が耳に入ってきて、驚きつつ、差し出されたのを受け取る。老婆がそそくさと逃げていくのを憎々しく眺めながら、僕は渡されたのを見ると、それはグミだった。

正確にはグミの形をした、凝固した血の塊ということだろう。青色に蛍光しているグミの塊が僕のでのひらの上でぶるぶるしている。食べさせる。食べるのではなく。誰に。この右腕に貼り付いて膨れ上がっている人面瘤に。

鼓動、心臓が躍動して血流が全身に駆け巡ることが、どく、どく、どくどくどくどくと力強くて手元が震えてくる。本当に、人面瘤に餌を与えるような真似をしていいものか。僕は明らかにこの人面瘤に対して嫌悪の感情を抱いている。それに対して、このグミを食べさせるということは不愉快、だ。きっとグミを食べさせたらむしゃむしゃと人面瘤は口を動かすのだろう。僕自身がどれだけ不快に思うかなど気にも止めずに、むしゃむしゃするのだろう。だが、顔の無い天使 は顔が無いから何を考えているかわからない。本当、今は見下ろしているだけだけど、早くしなければこいつは僕を殺す。宙に浮かんでいる男を殺す。

のっぺらぼうは表情がわからない。まったくわからない表情。だが、突然蛍光を開始した。黒い影のような色遣いをしていた、のっぺらぼうが、蛍光した。赤色に。僕の人面瘤も赤色に蛍光している。人面瘤が同調しているということ？それとも 顔の無い天使 が？ だめだ同調だけはしてはいけない。

焦りつつもそう悟って、唯一赤とは違うグミの青色に期待を寄せる。青は僕を冷静な気持ちにさせてくれる色だ。ならばきっと青と同調するが正しい。嫌悪するべき人面瘤や 顔の無い天使 に同調してはいけない。そうか餌ではない。このグミを食べさせることは人面瘤に対する、どちらかというところ攻撃、たる行為か。

そう閃いたことで決意が固まって、ならば話は早い、僕は青色のグミを人面瘤の口の部分に突っ込んだ。捻りこむようにして、押し込んだ。人面瘤は、いやいや、とでも言うような気味の悪い動作をするので、僕は腹正しくなってもっと力強くグミを押し込んだ。

無理矢理、食させる。

喉に押し込ませれば押し込ませるほど、人面瘤は苦しそうに、いやいや、と顔を動かす。ナイフで横に線を一本入れただけのようないない両眼と、小さな鼻、ポカンと開いている口。僕は迂闊にも、人面瘤に対して赤ん坊というイメージを感じ、感じてから後悔する。赤ん坊なんて可愛らしい、守らなくてはならないものじゃ

ない。だからグミを無理矢理食させる。いやいや、としているのだ、気にしてはならない。

人面瘤はグミを拒んでいるのだろう、より赤色の蛍光を強くする。そして人面瘤だけではない、それに呼応するかのようには、顔の無い天使も影のような黒から血のような真っ赤に、点滅を激しくしてみせる。そして灰色のローブに包んでいる身の、その長い両腕を高く掲げた。

やばい、と思った。顔の無い天使はいきり立っているように見える。やはり人面瘤と呼応している。人面瘤が嫌がるから、顔の無い天使も嫌がり、興奮しているということか。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

甲高い悲鳴。生物の発している声とは思えない、耳をつんざく超音音。それは言葉ではなく叫びでしかなかったが、顔の無い天使がどういう思いでその超音音を発しているのかは、さすがにわかる。こいつは、ブチ切れている。

かかげられていた天使の両腕が振り下ろされる。潰される、と思いきや慌てて背後に下がったが、地面の砂粒が幾粒も弾け飛ばされてきて、さらに地面に拳を叩き付けただけの癖に、その衝撃は凄まじく、そのせいでふわっ、と身体が浮かされて、骨が軋むほど叩きつけられた。

かはっ。

そんなのが肺から絞り出て、内臓から昇り上がってくる不快感。また吐くのか、と思ったが黄金の食卓でいろいろと上手いものを食べた、と過ぎった瞬間に吐き気が少しおさまった。

これが飯の力か、と思った瞬間に僕は人面瘤が大人しくなったとわかる。勿論顔の無い天使はいきり立っただけだが。しかし右手の袖の人面瘤は、青く、染まった。グミの力。いける、と僕はわかる。予兆。『腹の中で何か造られた』。

黄金の粒子が脳髄をザラザラと洗うような感覚と『腹の中で何か造られた』感覚二つが入り混じり、恐ろしくも期待したくもある

予兆と転じ、激しい頭痛という副作用を味合わせてはくる。

『腹の中で何かが造られた』

繰返し強調するかのようにその感覚は強まってきた、頭はジンジンと痛い。

だが腹の中から『造られた』それが迫り上がってくるのもわかって、そしてその迫り上がるモノは消化した食物ではなく、血反吐という奴でもなく。そう、人間の中から通常出てくるはずのものではない、だから『造られた』なのだ、と僕はジンジンする頭で支離滅裂な思考をした。混乱している混乱している、と自分でもわかる。だが『造られた』それが腹から喉へ、喉から口へと、そうやって登り上がってくるに伴って、快樂、安心、みたいな感覚も登り上がってくる。僕はめちゃくちゃな頭になりながら、遂に口からその柄が見えた時、握る所が見えた時、そうだその時、僕は激烈に感動した。武器だ、なるほどこれで 顔の無い天使 を……。弓なりに硬直して痙攣するかのよような姿勢になっている僕の、その口から登り上がってきたのは柄。

柄を僕は握って、一気に身体の中から引ッぱり出した。その時には異様と言っていい痛みが走り、ただでさえ痙攣していた身体がさらに震える。だが柄を握る拳にさらに力を込めて。

ずぶしゅあ。

そんなひどい音を鳴らしながら、露出させたのは一本の刀。血しぶきと共に、身体の中から。口の中から刀、細めではあるが長い刀身を持ったそれを。武器。……僕は右手にそれを持ち、青の霧を纏うそれを構えた。

お見事、お見事。皆、拍手、拍手喝采を！……………

背後から老婆の隙間風。

すると二十人くらいの人々が犬人間に跨ったまま、手と手を打ち合わせて、騒がしい拍手。完全に見世物だった。多くのその打ち鳴らされる音は、本当に感嘆して打ち鳴らされるというのではなく、形式的、という雰囲気がある。ただ僕自身は碌に事態を理解してい

ない。わけがわからない……。ただわかることは 顔の無い天使はまだイキリ立っていて、今しがた身体の中から出て来た青い霧を纏う細長い刀身の刀、これで戦わなければ、両腕で叩き潰されるなどして、殺されるということ。

僕は拍手喝采を背にしたまま、拍手が終わるのを待たないまま、駆け出す。

顔の無い天使 に斬りかかった。

赤色に蛍光している液体が斬り口から噴き出したと思うと、霧のようなものになる。その霧となったのを人面瘤が吸い取っていく。こうやって吸い取ることによって力になるのか、とわかりながら追撃していく。

だが、横殴り。ふきとんだ。

あ、死んだ、と思った。

全身を包帯で巻かれて、いる。

脛が腫れている感じがある。全身が重たい。ベッドの上で毛布に身体が包まれてはいるが、感覚でそれらが損傷していることがわかる。腫れとか、動かし辛い、とか。痛みもある。なんでこんなことになっているんだろう。

「まったく記憶が無い。……いて」

パツと見た感じ洋風な部屋だ。が全てが黒で塗られている家財であり、その自身が被っていた毛布の色でさえ黒。スタイリッシュとでも呼べば良いのだろう。ただ僕の身に着けている包帯だけは真っ白だが。そういえば、服を着替えさせてもらっている。これは、黒のスーツ……。何でスーツ？

ベッドから降りると眩暈。立ち眩みがする。

立ち眩みが終わってから思い出したのは人面瘤と、のっぺらぼうで長い手を持った、半円のような羽を持った灰色のローブ、顔の無い天使 のこと……。僕は慌てて黒スーツの袖をまくってみると、包帯がぐるぐると巻かれていて見えないので、ほどく。

「……………」

やはり、人面瘤は、ある。今は蛍光していないし、腫れも治まっています。

僕は段々と思い出してきた。顔の無い天使 が馬乗りになって僕をぼこぼこに殴りつけて……。骨が折れた、武器を手離して、死ぬと悟った辺りで、意識がなくなったはず……。この黒い洋間は棺桶を連想させるものがあるが、まさか死んだわけじゃないよな。

黒光りしている棺桶が縦向きで、壁に立てかけられているな、と思っ近づいて見たら、洋服箆筭だった。開けてみようかと思っしたが、鍵がかかっているので開かない。開かないのでは、棺桶という

ことだろう。

棺桶とは反対側、ベッドの隣にある窓。三角形の窓。それを両開きに外側へと開いて、入り込んでくる風が冷たいとわかる。長袖一枚だけではさらに寒く感じたことだろうと思えば、スーツを着せてもらえていたのはありがたいことだなー、と漠然と思う。

見える景色は庭。とても広い庭で、僕の目線から見下ろせる景色のほとんどが庭。果物が生っている樹や花園、うねうねした道、明らかに不自然なのは黄金の生っている樹。黄金が生るなんておかしなものだ。悪趣味なことだ。そういう樹が百本以上。果物だけ生らしていれば綺麗な庭って感じなのに、むしろ黄金と果物の両方の樹を生らしていることで、老婆が悪趣味だとより伝わってくる。食と金両方なくちゃ、みたいな。

庭師みたいな人だけで三十人くらいいる。その内の一人が僕が見下ろしているのに気が付いたらしく、会釈してきた。僕は彼らを見下ろしていることに何だか居たたまれなくなったので、

「やはり嫌なところに来た」

言いながら外開きの窓を閉じると、針の落ちる音さえも聞こえそうな静寂、と思えば、ハッ、ハッ、という吐息のような。後ろからなので振り返ると、入り口のドアがあるところに、何時の間にか犬少年がいた。茶色い大型犬の状態で。

わん、と吠える。

大型犬の尻の穴と尻尾を頼りにして、僕はタロットカードの置かれている通路を歩く。何でタロットカードが置かれているのだろう。しかも純金製。月のカードを引いてから、スーツの胸ポケットに何気なく入れて歩くことを再開する。犬少年は僕が立ち止まった時は、へッ、へッ、と舌を出してこちらを見て待っていてくれた。犬少年は忠実だな。と思いつつまた茶色い大型犬を頼りにして通路を進んでいく。右往左往。右往左往。通路は複雑で、長くて、老婆のいる

であろう部屋につくまでタロットカードを何組見たことだろう。大型犬は途中犬少年に変身して、

「ナラク様は、タロットカードがお好きです」

と説明した。老婆はナラクという名らしい。僕は心の中では、きつと彼女は金の方が好きだろう、と思ったが口には出さないでおいて、大型犬に戻った彼の尻尾と尻の穴を頼りに、右往左往、右往左往。迷宮のような館だ（犬少年がいなければ館から出ることもできない）。つまり老婆に命を握られてるようなものだろう、と僕は悲しくなって空しくなって衝撃が走ったが、そんな頃には翡翠のルーム。辿り着いてた。相変わらず浮かんでいるキューブだけは青紫色。他の色遣いは翡翠。

僕はそれらを見渡してから老婆に目をやる。ナラクという名のその人を。大型犬は犬の姿に戻るとナラクに一礼をしてから、僕にも一礼をし、そして左脇に下がった。僕は数歩前に出て、ナラクから見下ろされる位置で跪くような姿勢を作ってから、立ち上がり礼をした。

身体中が痛かったが、痛いからこそ礼を欠かせば甘く見られると思いついた礼儀であったが、それのおかげかナラクは、ふふつ、と薄く笑い玉座から降りると、風に吹かれる枯葉のように弱々しく、青紫色のキューブから降り立ち、僕の前にしわがれた装飾品だらけの身を、降ろしたと思うと、相変わらずの隙間風のような声、それをさらに潜めたような息遣いで言葉を紡いだ。

「痛かるう……？」

そして僕の手を握り取ると、枯れ木の枝のようなシワガれた手で、僕の包帯を巻いている、つまり痛い所を、老婆とは思えない力の強さでギュッと握り締めやがった。

「ぐっ……」

下手に声を上げて痛がれば負けだと思った。全身に汗が走り、神経に電流が走るような感覚が回ったが、しかし声は押し殺す。だが老婆は力を込めるのをやめない、このナラクという老婆は負けず嫌

いなのか、と動揺し、やがて気が錯乱してきて、声こそあげなかったが、その場で跪くことにはなった。片膝について。

ふざけんな……と怒りたい気持ちに塗れる。だが声を押し殺すことに気を配るに精一杯だ。反論をする余裕などもあるはずは無い。やがて老婆が腕を解放してみせた。僕は一気に脱力してその拍子に押し殺していた声を上げそうになったが、それも何とか堪える。全身の汗は冷や汗のように変わり、体中を寒くする。

解放された僕は跪いたままナラクを見上げると、彼女は何時の間にか僕が通路で拾い上げた、純金製の、月のタロットカード。あれを僕に見せ付けるようにして持ち、

「勝手に持ち出したというのは、調子に乗っているのではないかい？」

と呪うような言葉を呻く。そして彼女は自分自身の懐に、月のタロットカードを入れた。がめついとはこういうのを言うんだ、と口に出すことを堪えながら立ち上がるが、もう何か言葉を告げる気力も湧かないほど消耗したので、とにかくナラクという老婆が僕に用があるならさっさと告げて欲しいし、用がないならこの館から出させてもらおう、という気持ちになった。

だからしばらく黙っていた。

ナラクも何も言わないでアクセサリを愛でるようなことをしているの、しばらく翡翠ルームは静まり返ったものだった。

さっきまで青紫色キューブの上にあった玉座が、突如として空間転移でもしたみたいにナラクの居る所に置かれた。そしてナラクは玉座に座る。玉座に枯れ木が植わっている、というような光景にも見える。だがナラクは両眼だけが鋭い。鷹、或いは、鷲、か。目だけは動物としての意志を持っている、そういう老婆だ。

「お前は自由の身でもなければ、ものを楽しむためにこの世界を歩き始めたのではない。私ナラクの力があってこそ、あの同じことを繰り返すだけの無限牢獄から出られたのだということを、努々忘れるな。私の館にあるものを好き勝手に手に取り、さらに懐にしまう

など、なんたることか……信じられぬ愚かさ、考えられぬ浅はかさ……お前はこの世界のことを何も知らぬ、人面瘤があるからこそ利用される価値のある、その程度の人種だということを覚えておきなさい」

「……………」

何も答えずにいるのが吉だと思った。というか、それしか思いつかなかった。

そしたら隙間風を洩らすばかりだった老婆の癖に、大声を上げて笑った。はっはっはは、と翡翠ルームに響き渡る大声をあげたのだ。音が部屋中を跳ね回り、やがて反響が終わってから彼女はようやくく言った。

「世界のことを、教えてやろう」

一度は懐にしまったタロットカードを取り出して枯れ木の枝で弄ぶようにしながら、彼女はこの世界、について語り出した。僕はとりあえずそれを鵜呑みにすることにして、痛みを堪えながらだが、しっかりと聞いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7562x/>

甲乙付けがたい下僕ハッ？

2011年10月30日02時12分発行